４５分間の告白

書見氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
４５分間の告白

【Ｎコード】
Ｎ５２８５Ｚ

【作者名】
書見氏

【あらすじ】
初小説です。

女の子らしくも素直にもなれない女の子が告白しに行く話です。
半分実話です。私の。

私は階段をのぼる。
一段一段、しっかりと踏みしめ。
ただ一人想い続けてきた人に、その想いを伝える為に。

奴に会ったのは、小学五年生の山の学習のときだった。同じ学校ではなかったが、隣の学校ということで交流をし、最後の感謝の言葉交換のときに彼が出てきた。一目惚れかは知らないが、第一印象は良かった。
次に会ったのは、小学六年生から通い始めた塾だった。なんと同じ塾で、同じクラスだった。
中学校では同じ学校になった。
そして、中学二年生で同じクラスになり。
隣の席に、なった。
惚れない訳がなかった。
惚れない理由(わけ)が、なかった。

友達を通じてメアドをもらい、なんとか呼び出すことに成功した。
奴には、一週間前まで彼女がいた。
とても可愛い子だった・・・私には比べようもないくらい。
だけど、私は告白をしにいく。
砕けるとか、付き合いたいとか、そんなんじゃなくて、
ただ、奴が好きなだけだった。

呼び出した場所・・・教室に着いた。

見慣れた場所に、緊張感が少し和らぐ。
時計の時刻は現在十二時。一時間後には、私の部活が始まる。
「わっ・・・と、なんだ、坂本か」
「・・・お、ぉう・・・」
机の間から、ひょっこりと、奴が出てくる。
どうやら、先生が見回りに来たと思って、隠れたらしい。
「で、話ってなによ」
分かってるくせに。
きっと奴は分かってる。というか、女子に休みの日に呼び出されるなんて、一つしか考えられないだろう。
「早く言えって」
「え、えー・・・と」
「まぁいいや。俺、隣のクラスにプリント探しに行って来るから、帰って来るまでに話まとめといて」
「・・・おぅ」
奴は教室から出て行った。
さっぱりした奴である。
一つため息を吐くと、外から野球部の練習の声が聞こえているのに気がついた。
今まで気づかなかったなんて、かなり冷静じゃなかったらしい。
「ダメだなぁ・・・私」
本当にね。
本当に・・・好きなんだぜ、と野球部の練習を眺めながら思う。
例えば・・・夜眠れなくなるくらい。
胸が苦しくなるくらい。
ラブソングを聴くと、泣きたくなるくらい。
どうやったら伝わるんだろう。
「好きです」じゃ・・・敬語だし、硬くて私らしくない。
「愛してる」は、なんか違う。そんなに成熟してない。
「ダメだなぁ・・・」

せめて、友達にいい告白の仕方を聞いておくべきだった。
野球部をもっとよく見ようと、窓を大きく開いた。

「なにやってんのお前・・・」

「・・・！おおぅ高木・・・」
いつの間にか奴が帰ってきていた。
「なに、野球部？」
隣にやってきて、同じように野球部を眺めている。
顔が近い。身体が当たっている。身体が、体温が、熱い。
奴の肩越しに時計が見えた。現在十二時二十分。かなり時間がたっている。
「わーすげ。あ、坂部エラーしたぜ。だっせ～」
奴は野球部を見てケラケラ笑っている。
奴は昔野球をやっていて、上手かったらしい。でも、今は肩を痛めていて、できないのだそうだ。
今所属してる柔道部でも、かなり活躍してていいと思うけど。
「お、見ろよ。みんなの作文」
いつの間にか隣にいた奴は、いつの間にか離れてクラスの作文を読んでいる。
「ほら、『部活について　この前、部活の大会があった。顧問にレギュラーに選出されて、二年だけど試合に出ることができた・・・』これ、誰か分かる？」
「うぅ・・・んっと、宮本？」
「・・・すげ、正解・・・」
奴は作文から目をはなして、私を見てニヤッと笑う。
「これだけで分かるなんて・・・そんなに宮本が好きなの？」
「は？なんでそーなるの」
「だってさ、今ナナメの席だし、授業中もけっこうしゃべってるじゃん？正直好きなんじゃねぇ？」

「す、好きじゃねーし！」
ここで「好きなのはお前だよ」と言えたら簡単なのに。
私には言えない。
他のモテる女子は「やめてよ～」とか言いながら、かわいらしく笑いながら、女の子らしく相手を叩くことができただろう。いわゆる、ボディータッチだ。
だけど、私にはできない。
女の子らしく、なれない。
「やっぱり告白はやめようか」と思い始めた時、先生のよく履くスリッパの音が聞こえてきた。
「やべっ！見回りだ！おい、隠れろ！」
「う、うん！」
奴に身体を掴まれ、机の下へと押し込まれる。
そして、奴は私を隠すようにかがみ込んだ。
いよいよ身体が近い。
耐えられない。
心臓が、バクバクバクバクして、破裂しそうで、
これ以上、こんな近くにいたらーーー
と、思っていたら、スリッパの音が遠のいていった。
「ふー、もう大丈夫だぞ」
再び奴に掴まれ引っ張り出される。
「あ、りがとう・・・？」
「いいってことよ・・・で、」
で、と言って、奴はニヤリと笑う。
「話は？」
「あぅ・・・」
「ないの？帰るよ？」
「ある！あるよ・・・」
落ち着いていた悩みがまた帰ってくる。
なんて伝えよう。

なんて言って伝えよう。
私が口をぱくぱくさせていると、奴は再びクラスの作文を読み始めた。
「あ、これ美月のだ。こいつも部活かよ。あ、これは静香・・・」
静香は、奴の元カノの名前だった。
名前呼びなんだ。
そこにも、劣等感を見つける。
それと、嫉妬という感情も。
「静香も部活かぁ。まあアイツ、吹奏楽で・・・」
「好き」
「んあ？」
私は、奴に顔を合わせたまま、精一杯目を逸らして言った。

「好きだから・・・付き合って」

奴は相変わらずニヤニヤしていた。
そのままの表情で。

「いいけど？」

私の好きな人が、私の好きな表情で。

時計は、十二時四十五分を指して止まった。

（後書き）

わ～いw
公にお見せする初の小説です！
いろいろ技術を磨きたいと思うので、感想があったらお願いしますね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5285z/

４５分間の告白

2011年12月17日22時48分発行